

佐伯地方の姓氏 (四)

後藤・佐藤・山本

佐 脇 貫 一
(会員・佐伯市長)

後藤氏・佐藤氏は鎌倉武士の裔

第五位の苗字は後藤で、第六位は川野だが、川野氏についてはすでに記述したので、第七位の佐藤をとりあげ、後藤氏と関連して述べることにする。前述したように、後藤・佐藤あるいは藤田・藤井という上下に「藤」の字のつく苗字は、だいたい藤原氏の子孫に多いといわれているが、苗字の成因には種々の事由があつて、必ずしも藤原氏であるとは限らない。

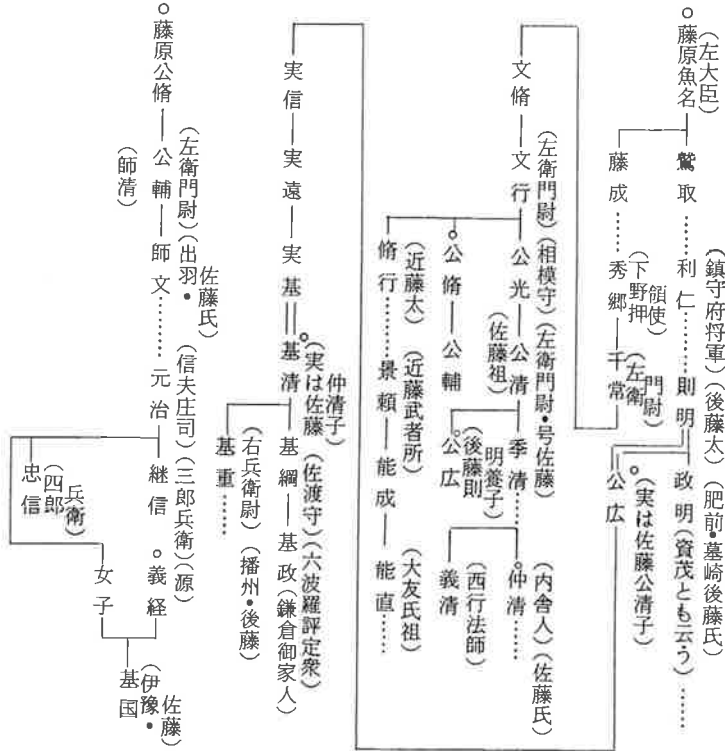
しかし、大分県では全県的に後藤氏や佐藤氏が多く、その理由として鎌倉時代に大友氏が豊後守護として下向したとき、随従して来た鎌倉武士団に佐藤・後藤・首藤・衛藤などの、大友氏と同じ藤原氏族の武士が多かつたといふのが、苗字研究者の定説になつてゐる。もつとも「お下り衆」といわれる大友義鎮家中の諸氏百五十家には齊藤・首藤・安藤があつて、前記の佐藤・後藤・衛藤

(大友十二筋という)の三氏はない。
後藤・佐藤の二姓は、佐伯地方でも各市町村に拡散しているが、後藤氏は佐伯市と蒲江・直川両町村に多く、佐藤氏は佐伯市と宇目・蒲江両町に多い。

さて、後藤氏は別掲略系図のように、本来は藤原氏利仁流である。鎮守府將軍藤原利仁は北家の左大臣魚名の後で、この一族は北陸一円に繁栄した。利仁の子叙用が齊宮寮頭(さいぐうりょうのとう)であつたので、族党を齊藤党と称したが、叙用の子吉信が加賀守に任ぜられたので、その裔を加賀齊藤といひ、これから足田齊藤・鏡齊藤・河合齊藤・長井齊藤・勢多齊藤・吉原齊藤の各氏が分派している。

後藤氏は加賀齊藤の後で、吉信の孫公則が備後守あるいは肥後守に歴任したため、家号を後藤と称した。この

(後藤・佐藤氏略系) (大友氏と後藤・佐藤氏の関係)



公則の孫則明は後藤太則明といったが、河内国坂戸(古市郡坂門)に住み坂戸判官則明とも称した。前九年の役の時、鎮守府將軍源頼義に従い、東奥七騎の一人に教えられた猛将である。則明の子政明は鎮西に下り、肥前墓崎に住んだので墓(塚)崎後藤介と称したが、肥前後藤氏系図によると則明は章明(のりまさ)、政明は資茂となっている。則明の次男は惟峯(のりたけ)といい信濃国に住み、墓崎後藤三と称した。則明の名跡を継いだのは秀郷流佐藤公清の子公広で、左衛門尉に任じた。公広の子実信は白河院武者所となり、以来北面の武士として禁中に奉仕したが、実信の孫実基(のりもと)がなく、左衛門尉佐藤義清(西行法師)の兄内舍人佐藤仲清の子基清を養子にした。基清は左兵衛尉と称し、承久の変に際して鎌倉方に応じたという。この基清の子基綱は玄蕃頭または佐渡守と称し、六波羅評定衆となった。

後藤氏には則明の子等を祖とする利仁流と、公広を祖とする秀郷流があるが、公広

は則明の名跡を継いだため利仁流ともいう。寛政重修諸家譜には後藤氏九家（旗本）があるが、いずれも利仁流といわれ、家紋に「丸に枝柏」「丸に三ツ柏」等を用いている。

黒田長政に仕えて筑前大隈一万六千石の城主だった後藤又兵衛基次は主君長政と不和になり筑前を去った。諸国を流浪の末、秀頼の召しに応じて大坂城に入り、元年五月、豊臣氏と運命を共にした。又兵衛基次は播磨三木城主別所長治の重臣後藤將監基国の子、その先は播州後藤氏、安田城主後藤基重という。家紋は「下り藤丸」なお後藤氏には利仁・秀郷二流の藤原氏のほか、藤原北家長良流、宇多源氏（安倍氏族）佐々木氏流、秦氏族（惟宗氏）島津氏流などの異流がある。

大友氏の部将をはじめ、田原氏・志賀氏・朽網氏の家中に後藤氏があったことは軍記類に記録されており、大友氏につながる鎌倉武士団に豊後後藤氏の祖先があったことを示唆している。また佐伯地方の後藤氏については、梅牟札実録に後藤出羽守・後藤宮内などの名が見え、古くからこの地方にも後藤氏があったことはわかるが、どの氏族、どの系統に属するかは明らかでない。幕末から明治にかけて郷土の史家文人として著名だった大分郡乙

津村（天領）の後藤領田は通称を今四郎といい、豊後諸藩に金融した富商であった。

佐藤氏は県下最多の苗字

佐藤氏も全国的に多い苗字である。佐藤氏は田原藤太といわれた藤原秀郷の後で、代々左衛門尉に任ぜられたので左藤または佐藤と号したという。しかし、佐藤姓の起因については東北地方の佐藤氏に伝わる佐藤家譜によると、相模守公光の子公清が佐渡守に任ぜられたので、佐渡の佐と藤原の藤をとって佐藤と称したといい、この公清が異母弟の公輔に名跡を譲り、公輔は左衛門尉となつて佐渡に住み、その子師清が出羽守に任ぜられて奥州に下つたという。また美濃の佐藤氏には、佐藤公清の父公光が故あつて豊後国佐伯荘に下り、檢非違使佐伯の大神惟基の養子となつたので、佐伯の藤原氏というわけで佐藤と称したという伝承がある。

佐藤氏で歴史上もつとも有名な人物は、源九郎義経の従士として源平屋島の戦に、主君義経の楯となつて討死した佐藤三郎兵衛継信と、義経の奥州落ちに際し、主君の愛姫静（静御前）を護衛して吉野に隠れたが、追手をうけるや主の身代りになって死んだ継信の弟四郎兵衛忠信で、全国各地の佐藤氏にはこの兄弟の子孫というもの

が多い。

源平合戦の花形勇士継信、能や歌舞伎で静御前のバー
ドナーになる忠信、彼らは奥州平泉の覇者鎮守府將軍藤
原秀衡の家人、信夫莊司佐藤元治の子といわれている。
豊後では速見郡大神郷（日出町）の佐藤氏が忠信の後と
いわれ、その祖佐藤縫之介は建治二年（一二七六）奥州
から豊後に来り、大友因幡守親時に仕えたという。この
一族の家紋は「丸に二引両」である。また国東郡の佐藤
氏は継信の後と伝え、文永の役後国東半島の浜辺に漂着
した五人の鎧武者の裔で、家祖を佐藤公義という。

このほか速見・大分地方の佐藤氏には伊豫佐藤氏の末
というものがある。この佐藤氏は信夫莊司元治の女、つ
まり継信・忠信兄弟の妹が、判官義経の妾になり生んだ
子を、彼らの父である莊司元治が己れが子として育て、
佐藤の姓を名乗らせて冠者基信と称したものの。基信は故
あって伊豫に下り、四伝して基久のとき、興國三年（一
三四二）脇屋義助（新田義貞弟）に従い宮方の一将とし
て足利方と戦った。基久は正平中、戦死したと伝えるが、
その一族は脇屋氏と共に九州に渡った。家紋は「竜胆」
または「源氏車」という。

大友氏に従って豊後に入った佐藤氏は大友一族である。

大友氏の始祖能直の外祖父波多野経家は相模国大友郷の
地頭職だったので大友四郎と称したが、経家は佐藤相模
守公光の子佐藤波多野経範の後で、筑後権守佐藤遠義の
子である。経家の二女子のうち長は中原親能の妻、次は
近藤能成の妻になった。この近藤能成の子が大友能直で、
能直は伯父にあたる中原親能の養子になり、また外祖父
大友経家（波多野）の名跡を継いで大友氏を称した。経
家の弟義景も大友氏を名乗ったが、義景の子信景は佐藤
武者と称し、大友氏の豊後下向に従った。これが大友系
佐藤氏で、家紋は「杏葉」または「下り藤丸」

佐藤氏は全国各地に蕃延しているが、秀郷流佐藤氏、
左衛門尉公清の裔には奥州佐藤氏以外に幾多の佐藤氏が
ある。例えば嫡流である康清の子には有名な歌人西行法
師（左衛門尉義清）があり、西行の兄仲清（後藤基清の
父）の後に佐藤冠者成清がある。また公清の孫清兼の子
には佐藤太公康があつて、成清は河内佐藤、公康は紀伊
佐藤の祖といわれている。

さらに藤原氏以外の佐藤氏もあるが、その多くは秀郷
流佐藤氏を冒称している。『家系宝鑑』（佐藤清隆氏著、
佐藤一族の家系を調査したもの）によると、大分地方に
は大在の名族佐藤氏のほか、寒田村佐藤・津守村佐藤・

木ノ上村佐藤・田野村佐藤・小野村佐藤・谷村佐藤などがあるという。

日田郡津江の佐藤氏は雪ヶ嶽城主津江氏（古族長谷部氏の裔）に属し、津江の三家老の一人であった。佐藤出雲守永信は津江氏没落後、大友氏に仕え雪ヶ嶽城代をつとめ、坂本・財津・羽野・石松・堤・高瀬・世戸口各氏と共に日田八人衆とよばれた。この佐藤氏は日田大蔵氏族である。



丸に下り藤

それでは佐伯地方の佐藤氏ほどのような系統であろうか。各家それぞれに伝承はあるようだが、もっとも多いのは奥州佐藤氏説である。佐伯



車源氏

藩祖毛利高政に認められて城下惣庄屋を命ぜられた河野茂右衛門は前名を佐藤新左衛門といひ城外塩屋村庄屋であった。旧佐伯藩士の佐藤氏は



丸に三ツ柏

士分に六家、足軽・目見格に三家ある。また藩領内大庄屋には下直見村に佐藤氏がある。これらはいずれも明治初年の平民称氏以前に苗字を名

乗っていた名家であり、旧家であるが、各家の家系は必ずしも詳らかであるとはいえない。家紋は「丸に下り藤」「九枚笹」など。

佐伯藩八代毛利伊勢守高標のときであった。奥丁（おとらふ）陸尺（りくしゃく）といひ、かごかきのこと）に吉右衛門という者があり、藩の講武所の隣に住んでいた。日頃から槍術を好み、暇があれば道場に行き、槍の稽古を見た。やがて槍のつかい方を覚えたので、あらためて師を求めて槍術を練磨し、奥義を会得した。高標はこれを知り、吉右衛門を抜擢して徒士に登用、講武所に出仕させ、子弟の教育にあたらせた。この吉右衛門は直見村の人といわれ、生家の姓を名乗り佐藤吉右衛門と称した。

九代高誠（美濃守）・十代高翰（当時若狭守）に仕えた徒士佐藤直金は生来武を好み、父（吉右衛門か）に就いて鏡智流槍術の秘奥を学び、また揚心流柔術をよくした。つねに人に語って「武人には軽躁（ちやうそう）のものが多く、文人の温厚なるには及ばぬ」といひ。自ら進んで小笠原流礼式を修め、出処進退に心を配った。藩中の子弟は直金について槍・柔・礼の三技を学んだという。文化十二年（一八一五）十二月、直金は中小姓格になった。

安政年中の下直見村大庄屋は佐藤由助であるが、六代藩主高慶（周防守）の頃から、しだいに盛んになった植林事業を推進、声価の高い直見杉を養成して藩財政に寄与した佐藤甚兵衛は下直見村の大庄屋、彼はこれまで実生であった杉苗を挿穂で育成した。その子六代甚兵衛豊光は父に次いで植林に成績をあげ、藩命で城山の植林を行なった。七代甚兵衛豊雄も植林に生涯をかけ、祖父・父について優秀な森林経営を行なった。この佐藤氏は代々甚兵衛を襲名したから、安政年中の佐藤由助は本名で先代が隠居すれば何代目甚兵衛を襲名する人であろう。豊雄の子豊服は佐藤算平といい囲碁をよくした。彼は天保十三年（一八四二）六月、幕府の基所長安井算知（算は算と同じ、竿とも略して書く）から碁学三級を授けられたが、後五級に進んだ。家紋は「源氏車」という。

大分県における郷土史家の草分けで、また新聞人として、あるいは地方政客として明治中期から末期にかけて活動した鶴谷外史佐藤蔵太郎は旧佐伯藩士、明治十四年矢野龍溪に囑望されて上京、郵便報知新聞社に入り記者として活動した。当時報知紙は反政府系の論説で、政府批判をしたが、これは犬養毅・尾崎行雄・箕浦勝人らの硬派の連中で、佐藤蔵太郎は社会欄の編集をする軟派記

者だった。それで仮名垣魯文らと交り、魯文調の諧謔諷刺や政治小説・教育小説等を筆にしたが、矢野龍溪の外遊を期に郵便報知社を去り、島根県松江の八雲新聞社々長兼主筆となった。時に明治十八年二月で、当時いわゆる洛陽の紙価を高からしめたといわれる菊亭香水（佐藤蔵太郎の筆名）の『悲雨惨風世路日記』を上梓した直後であった。この小説は明治十七年六月の初版から同四十一一年の五十八版まで発行、満都の子女の紅涙をしぼったといわれる。佐藤蔵太郎が新聞人としてもっとも活躍したのは明治十九年九月、大分県に帰り、豊州新報主筆になってからで、同時に改新党派政党人として新聞論説に弁論会等に活動した。新聞の発行経営に意欲を燃やしたのは明治三十二年頃までで、その後は隨筆またはコラムに筆を染め、しだいに郷土史の研究と執筆に移った。明治三十五年豊州史談会をつくり、雑誌豊州史談を主宰し、以来史筆をとり、明治・大正・昭和にかけて四十数篇の郷土史（県史・郡史・町村史・社寺史・伝記等）を著作編纂した。

このように佐伯地方にも名家・旧家の佐藤氏が多いが、家系を語る古文書などはなく、昔話的な伝承と家紋があるのみである。

山本氏は全国各地の地名から

山本氏は佐伯地方では第八位であるが、全国集計では第四位になっている。山本氏は初めは地形による地名、家号、後にはその地名による苗字となったもののように、山本の地名は全国各地にある。まず郡名としては出羽山本郡（秋田県）、筑後山本郡（福岡県久留米市）、肥後山本郡（熊本県鹿本郡）があり、荘園には山城・山本荘（京都府綴喜郡）、大和・山本荘（奈良県高市郡）、摂津・山本荘（兵庫県宝塚市）、越前・山本荘（福井県鯖江市）、讃岐・山本荘（香川県坂出市）、肥後・山本東荘・山本西荘（熊本県鹿本郡）などがある。また村邑名となると全国各地にあって、それぞれ地域の山本姓の発祥地と推測され、何らかの関連伝承をもっている。

有名氏族の山本氏には、旧堂上家の山本氏をはじめ、清和源氏義光流、清和源氏吉見氏族、清和源氏新田氏族、桓武平氏大掾氏族、宇多源氏佐々木氏流、丹波氏族日下部流、宋帰化族張季明の後などがある。

このうち堂上山本家は藤原北家閑院流阿野家の支流、清和源氏義光流は近江国浅井郡山本に住んだ左衛門尉義定を家祖とするもので、義定の長男義経は山本冠者（もとむら）と称して、治承五年（一一八一）以仁王の令旨に応じて挙兵

した近江源氏の一人、吉川英治の新平家物語に登場する湖賊の頭目山本義経である。この義経の子義弘、弟光祐らの子孫はいずれも山本氏を称し、寛政重修系譜によるとこの流は二十七家に分れているという。家紋は「鳥居」あるいは「丸に四石畳」をつかっている。清和源氏吉見氏族は蒲冠者源範頼（頼朝弟）の後、吉見二郎為頼の裔が山本氏を称した。桓武平氏大掾氏族は平国香の子繁盛の孫大掾為幹の後に山本四郎国幹・同五郎武幹が出てい

る。渡辺三男氏の『日本の苗字』に大友氏や菊池氏の一族にも山本氏があると書いている。この大友氏は大伴氏族を指したのではないかと思うが、豊後の“としてあるから豊後守護の大友氏に違いないだろう。前述した肥後国山本郡は菊池氏の本拠である菊池郡やその一族が割拠する合志郡と隣合っており、山本郡には古くから山本・西山本の二荘が置かれ、菊池・合志二郡には千田荘・佐野荘・合志荘などがあり、山本荘をめぐって菊池一族の苗字発祥地と見られる地名が多い。例えば千田・佐野・合志の荘名をはじめ、蛇塚・林原・恵良・小野などの地名（村邑名）があつて、いずれも菊池支族の起った土地のようである。

一方、豊後国内には山本という村邑名はなく、また大友氏庶流に山本氏を名乗ったものはない。しかし、豊後諸氏の家中に山本姓のものはあったようで、例えば緒方惟栄の遺臣に山本源太有明という者があり、正治年中、主君惟栄の菩提を弔うため僧となり佐伯荘古市村（現稲垣字龍護寺）に庵を営んだという。これは羽明山龍護寺の開基伝承だが、緒方惟栄の家臣に山本氏があったという証にはなる。

若し山本姓が地名に由来するものとすれば、佐伯地方だけではなく、大分県内にも多い山本姓である。何処か近接した地域に山本の地名がなければならぬ。豊後地方にもっとも近い、関係の深い地方といえば、まず豊前ついで肥後、筑後、日向、伊豫だが、肥後の山本郡や東西山本荘についてはすでに述べた。筑後の山本郡は現在の久留米市内で、安楽寺領（太宰府天満宮）葦野荘があり太宰府宮の勢力範囲であるから一応措き、豊前国について考えてみよう。

豊前国には郡名・荘園名などに山本の地名はないが、村邑名には三か所ある。そのうち著名なものは宇佐市山本で、旧駅川町付近の虚空蔵寺廃寺跡、地名によって山

本廢寺跡という。次は築城郡臼田荘山本（築上郡椎田町）で、平氏全盛時代に内大臣平重盛の家人となった緒方惟栄に支配（豊前は重盛の領国）されたから、惟栄の家臣山本有明と関係がありそうである。三は企救郡中谷（北九州市小倉南区）で紫川上流地域、文字どおり山本（山元）といたい村落である。

佐伯地方の山本氏の発祥地が何処であるかは、なかなか推測できないが、梅牟礼城主であった佐伯紀伊守惟教（宗天）家中に山本久弥という者があり、天正六年（一五七八）の日向耳川の戦に従軍、惟教父子が戦死した後、遺言により佐伯に引上げている。

また藩政時代になると、毛利高政の御歩行衆二十一人のなかに山本九郎左衛門と山元次左衛門があるが、この山本と山元は相通じる苗字で、古記録にはよく混用されている。しかし、佐伯藩席帳では別の苗字になっており、天保の家中席帳には取次格に山元恰、中小性格に山本太左衛門がある。もちろん現在の戸籍簿では山本と山元は別の姓氏である。家紋はだいたい藤原氏が鷹の羽や梶の葉、源氏が鳩・巴・蒿・目結（佐々木流）、平氏系が酢漿草、菅原系が巴・山文字となっている。（つづく）